

コメニウスにおける地理と教育

——地理教育の思想史的考察の試み——

相馬伸一

(受付 2009年10月27日)

はじめに

本稿の課題は、コメニウス (Johannes Amos Comenius; Jan Amos Komenský, 1592-1670) における地理と教育の関係を概観することをとおして、地理学習の意義の一端を思想的に考察しようとするところにある。

コメニウスが本格的に受容されたのが明治の近代化以降である日本では、彼はもっぱら教育家として見なされてきた。たしかに、コメニウスは、『大教授学』(*Didactica magna*, 1632-1638年頃に成立, 1657年刊)に見られるように教育の目的・内容・方法・制度にわたる体系的な理論を構築し、さらに、世界初の絵入り教科書とされる『世界図絵』(*Orbis pictus sensualium*, 1658)を著すなど、教育の理論にとどまらず実践にも関わった。この意味で、彼を教育学者・教授学者・教育思想家としてとらえるのは間違いではない。19世紀において教育史が叙述され始めると、コメニウスは「諸国民の教師 (učitel národů)」と称された。

しかし、コメニウスの活動は教育にとどまるものではない。彼は、ルター (Martin Luther, 1483-1546) に先立って宗教改革を唱えたフス (Jan Huss, 1370?-1415) の流れを汲むチェコ兄弟教団 (jednota bratrská/unitas fratrum) の最後の主席監督であり、宗教者・神学者として知られる。また、ルネサンス末期の学問を広く学び、独自の哲学体系である汎知学 (パンソ피아, Pansophia) を構想した哲学者でもあった。彼は、近代哲学の祖・デカルト (René Descartes, 1596-1650) とも面会し、哲学論議を行っている¹。このほか、彼が青年期にチェコ語文学の古典といわれる『地上の迷宮と心の楽園』(*Labyrint světa a ráj srdce*, 1623年草稿執筆, 1631年刊)²を著した事実に注目すれば、彼を文学者と見なすこともできる。

要するに、コメニウスはルネサンスの普遍人 (homo universales) としての多面性の持ち主であった。そして、これまであまり注目されてこなかった彼の一面として、本稿が目す

1 この点については拙著『教育思想とデカルト哲学——ハートリブ・サークル 知の連関——』(ミネルヴァ書房, 2001年)を参照されたい。

2 藤田輝夫訳、相馬伸一監修『地上の迷宮と心の楽園』東信堂, 2006年。
1623年当時の表題は『地上の迷宮と心という別荘』(*Labyrint světa a luthauz srdce*)。

る彼の地理への関心がある。結論を先取りしていえば、彼は17世紀ヨーロッパの地理学の学問水準を踏まえたうえで、地理的知識の学習を人間形成の重要な構成要素として明確に位置づけたと見なすことができる。この意味で、彼は地理教育の父ともいえるわけであり、彼において地理と教育がどのように関係づけられていたかを考察することは、地理学習の原理を思想的に考察する一助となるといえる。

以下、本稿では、①コメニウスの地理への関心の展開をフォローし、②そのひとつの結実としての『モラヴァの地図』(J. A. コメニウス著、最新の最も正確なモラヴァの描写) (*Moraviae nova et post omnes priores accuratissima Delineatio auctore I. A. Comenio, 1627*) の概要と特質を確認したうえで、③彼において地理的知識が教育的課題として位置づけられるに至った過程を素描し、④教育実践において地理的知識を扱う意義の一端を論じていく。

なお、本稿においては、コメニウスの地理的関心についての先行研究をフォローし、なおかつ教育学的考察を加えたシュベルリンク (Walter Sperling) による論考「コメニウスによる1627年刊モラヴァの地図」(*Comenius' Karte von Mähren 1627, Karlsruher Geowissenschaftliche Schriften, Band 4, Fachhochschule Karlsruhe, Karlsruhe, 1994*) に依拠するところが大きかった。同論考の入手にあたっては、追手門学院大学心理学部教授・井ノ口淳三氏のご厚意に与った。記してお礼申し上げる。同論考からの引用は著者のイニシャル WS にページ数を付して本文中に示す。また、コメニウスのテキストからの引用は、以下の略号に巻数とページ数を付して本文中に示す。

OOJAK: *Opera Omnia Jan Amos Komenský / Dílo Jana Amose Komenského*, Academia, Praha, 1969-

CC: *De Rerum Humanarum Emendatione Consultatio Catholica*, Tomus I-II, Academia, Praha, 1966.

図絵: コメニウス, 井ノ口淳三訳『世界図絵』平凡社ライブラリー, 1995年。

コメニウスと地理

コメニウスが学問的に地理に関心を深めたのは、彼の修学経験によると考えるのが妥当であろう。16世紀末、現在のチェコ共和国東部地方のモラヴァ (モラヴィア) に生まれた彼は、幼くして両親を失い、チェコ兄弟教団の学校で教育を受けるが、1611年から2年間にわたりドイツに遊学した。彼が学んだのはフランクフルトから南方に70キロほどのギーセンに近いヘルボルンという街の学校であった³。ここは、いわゆる大学という呼称は与えられていなかった

3 ヘルボルンについては、拙稿「第25回コメニウス研究国際コロキウムに参加して」(日本コメニウス研究会年報『日本のコメニウス』第16号, 2006年, 109~110ページ)を参照されたい。

だが、ナッサウ侯爵領にあってプロテスタント改革派の高等教育機関として重要な位置を占めていた。当時は、とくに神学を学ぶにあたっては宗派的制約が大きく、宗派的に最も寛容な学校の一つがヘルボルンのそれであった。

コメニウスがヘルボルンに学んだ当時は、該博な神学者・哲学者アルシュテット (Johann Heinrich Alsted, 1588-1638) が教授として在職していた。アルシュテットは、長大な百科全書を著したほか、千年王国論的な宗教思想の持ち主であった。アルシュテットに師事するなかで、コメニウスは世界の全事物を網羅しようとする百科全書主義の視点を学んだ。これが、のちに彼独自の哲学体系である汎知学へと発展していく。ヘルボルンで、彼は神学はもちろんのこと、数学・天文学・測地学といった自然科学にも触れた。その後、ギーセンやマールブルクの大学やオランダのアムステルダムを訪れた彼は、1613年にハイデルベルク大学で修学を締めくくった。ここで彼は、神学を研究するかたわら、数学や天文学にも触れた。

修学を終えたコメニウスは故郷に戻り、かつてみずからが学んだプシェロフのラテン語学校で教鞭をとる。プシェロフはモラヴァ辺境伯領の中心地オロモウツ南方の町で、現在はチェコ共和国の主都プラハに次ぐコメニウス博物館がある。コメニウスはここでの教育活動の一方で、モラヴァ辺境伯のジェロチーン家の系図や『モラヴァの遺産』(*Antiquitates Moraviae*) を著したが、その過程で郷土の地理や歴史への造詣を深めていったと考えられる。そして、彼の生涯にわたる学問的課題であった汎知学の体系化への取り組みも、この時期に着手された。断簡が現在に伝えられている『全事物界の劇場』(*Theatrum universitatis rerum*, 1614-1627) は、神と世界と人間という三つの視点から世界を描写しようとするもので、地理的知識は世界を記述するための重要な構成要素であった。

しかし、その後、フルネックでチェコ兄弟教団の牧師となって間もなく、三十年戦争が勃発し、1622年からコメニウスは神聖ローマ皇帝軍の追手から逃れるために国内逃避行を余儀なくされる。この間、彼は妻子を失い絶望に陥るが、自身と兄弟教団の同志のために聖書の章句を引いた著作、いわゆる「慰めの書 (utěšené spisy)」を著した。このなかで最も重要な作品が、チェコ語文学の古典とされる『地上の迷宮と心の楽園』である。これは、コメニウス自身が投影された主人公の若者が天職を求めて世界に巡礼に出るものの、多くの虚偽に出会って絶望し、ついに自身の心中で神と出会って再生するという筋書きの小説であるが、本稿において重要なのは、この作品の草稿に含まれている地上世界の模様を描いた絵画である(図1⁴参照)。

4 オリジナルは、チェコ国立図書館に所蔵されている (XVII.E.75)。なお、同図書館の許可を得て、『地上の迷宮と心の楽園』の口絵にこの絵画を収録している。
この図は、井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』(ミネルヴァ書房、1998年、29ページ) から引用した。

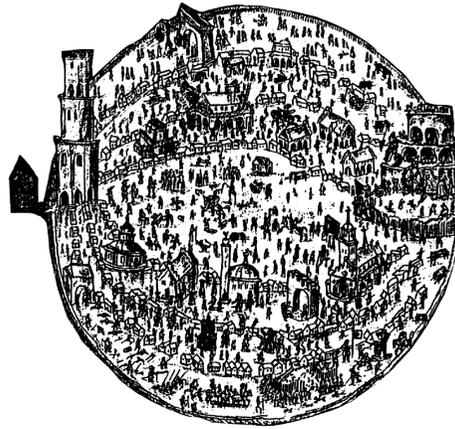


図 1. 地上の迷宮

この絵画は、コメニウス自身が描いたものと考えられており、カラーで描かれ、草稿の第 5 章に挿入されている。絵画の左に塔が描かれているが、コメニウス自身が投影された若者がこの塔から見た地上世界の模様が描かれているわけである。『地上の迷宮と心の楽園』は全 52 章からなるが、絵画に描かれているのは「地上の迷宮」が叙述された 36 章までの模様である。この絵画には、この時代のヨーロッパの都市に一般的な市街広場をはさんで 6 つの街路が描かれている。それらは象徴的な意味が込められており、上から①結婚・家庭、②さまざまな職人の仕事、③学識者たち、市街広場をはさんで、④さまざまな宗教、⑤君主等の政治家たち、⑥兵士と騎士が描かれている。物語の筋では、これらの 6 つの街路を歩んだ巡礼が現世の虚偽を知って深い絶望に陥るのだが、人間生活にまつわるトピックが 6 つの街路に分類化して示されているという点で、コメニウスの人文地理的な世界叙述の関心をうかがうことができる⁵。

次に触れる『モラヴァの地図』が印刷出版されたのは、『地上の迷宮と心の楽園』の草稿執筆から 4 年後の 1627 年のことである。この年の 5 月、神聖ローマ皇帝側はチェコ王国に勅令を發布した（モラヴァ辺境伯領には翌年発布）。その内容は、ローマ・カトリックのみを公認宗教とし、他の宗教宗派を信奉する者は改宗しない限りチェコを離れなければならないというものであった。そこで、翌 1628 年、コメニウスを含むチェコ兄弟教団の面々はポーランドのレシュノに移った。そして、以後、コメニウスは祖国の土を踏むことなく、イングラ

5 この絵画についての研究としては、次の論考が参考になる。
井ノ口淳三「『地上の迷宮と魂の楽園』における挿絵の意義」（平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B-1））研究成果報告書『初期コメニウス思想の総合的研究——迷宮からの脱出——』2006 年、10～24 ページ）。

ンド、オランダ、スウェーデン、ハンガリーを転々とする流浪の人生を送ることになる。

レシュノに移ったコメニウスは、すでに着手していた汎知学と教授学の研究を発展させた。1631年には語学教科書『開かれた言語の扉』(*Janua linguarum reserata*)を発刊し、これはヨーロッパのみならずアジアの各国語に翻訳され、17世紀のベストセラーとなった。また、この時期に、発刊はされなかったものの、チェコ語による『教授学』(*Didactica*)を完成させている。これがラテン語に翻訳されたのが『大教授学』である。そして、1633年には『神の光に向けて改革された自然学綱要』(*Physicae ad lumen divinum reformandae synopsis*)が発刊された。ここには、彼が生涯維持した「神の三書 (*Tres libri Dei*)」という世界観が示された。神の三書とは世界・精神・聖書であり、彼は、感覚・理性・信仰によってそれらを把握することで人間は完成に至ることができると考えた。

コメニウス教育思想の作品史においては、『大教授学』は教育学研究の主著とは必ずしもいえないが、ラテン語に翻訳されたことと、19世紀後半以降の国民教育の制度化のなかで『大教授学』がドイツ語や英語に翻訳されて普及したことで、『大教授学』はコメニウスの主著と見なされている。日本においても、1960年代初頭に鈴木秀勇が詳細な註を付してラテン語原典からの邦訳を刊行したことで、現在でも一般的にはコメニウスの主著と見なされている。

とはいえ、『教授学』『大教授学』には、彼自身の発達段階論とそれに対応した4段階の学校制度論が示され、地理的知識を含む学習の目的や課題が明示されている点で重要である。詳しくはのちに触れるが、地理的知識の学習については、すでに『教授学』で言及されている。『教授学』本文は全30章、『大教授学』本文は全33章からなり、第27章までは両書の内容はほぼ対応しており、地理的知識の学習については両書とも第27章に言及がある。なお、『大教授学』では、第28章以降で、4段階の学校教育についての各論が展開されており、地理的知識の学習についても詳細な言及がある。ここに、コメニウスの地理学習についての思索の発展をうかがうことができる。

コメニウスは、レシュノ滞在后、内戦勃発直前の1641年にイングランドにわたり、その後、オランダ、ドイツを経て、当時、スウェーデンが支配下におさめていた現ポーランドのエルブロンクに滞在し、語学教科書の編纂に携わる一方で汎知学研究を進めた。1648年、三十年戦争のウェストファリア講和が締結されるが、これは祖国への帰還の希望を打ち砕くものであった。再びレシュノに戻った彼は、チェコ兄弟教団の主席監督となり、その後、ジーゲンビュルゲン公国のラーコーツィ家に請われ、現ハンガリーのサロシュバタクに移った。ここで彼は、学校経営の実践にあたり、演劇を取り入れた教育や図を用いた教科書の研究を重ねた。これらの実践は、『遊戯学校』(*Schola ludus*, 1653)や『世界図絵』に結実した。とくに、のちに見るように『世界図絵』には、150課のうち地理的知識の学習課題が図版とともにさまざまな文脈で提示されている。

サロシュパタクからレシュノに戻り、その後、晩年をオランダのアムステルダムに過ごしたコメニウスは、教授学研究を集成した『教授学総著作集』(*Opera omnia didactica*)を1657年に発刊したほか、汎知学研究の完成にとりくんだ。1670年に死去した際に、汎知学研究が集成された『人間に関する事柄の改善についての総審議』(『総審議』と略記)(*De rerum humanarum emandatione consultatio catholica*)はほぼ完成していたが、一部が発刊されたのみで、その存在は長く忘れ去られた。この草稿は1935年にドイツ・ハレで発見され、全体が出版されたのは1966年のことである。『総審議』の第4部は『汎教育』(*Pampaedia*)と題され、コメニウスの教育思想の最終的な到達点と見なされる。コメニウスは汎知学研究を進める過程で、教育の視点を教授から学習に移していった。また、人生と世界での体験のすべてを学習と見なす生涯学習論的な主張を展開した。このためか、『汎教育』にはいわゆる学校で学ぶような地理的知識についての言及はない。

コメニウスによる『モラヴァの地図』

ここでは、コメニウスによる『モラヴァの地図』の概要、特徴、成立過程について、シュペルリンクの研究とドラーペラ (Milan Drápela) の研究⁶に依拠しつつおさえておきたい。

『モラヴァの地図』に言及する際に必ず触れなければならないのが、ファブリキウス (Paul Fabricius, 1519-1588) による1569年版のモラヴァの地図である。コメニウス作とされる地図に対して約60年前に現れたこの地図に対して、コメニウスの地図にいかなるオリジナリティーが認められるか否かが、コメニウスの地理的関心と知識について考察する上で重要である。

ファブリキウスは神聖ローマ皇帝マキシミリアン二世の侍医であり、ウィーン大学の数学教授および医学教授も務めた。植物学、天文学にも関心を持ち、広い関心を有した知識人であった。彼によるモラヴァの地図は、大きさが470×356ミリ、縮尺は約1:288.000である。山岳は、モグラが作った盛り土状の図形で示されており、都市名はドイツ語で表示されている (WS: 19-20)。

これに対して、コメニウスの地図は、大きさが544×442ミリ、縮尺は約1:470.000である (図2) (JACO01:224-232)。上部にボルナー、オロモウツ、ブルノ、ズノイモの4都市の遠景が描かれ、その下にモラヴァの地図が示されている。地図の右上角に表題があり、「著者 I. A. コメニウス」と明示されている。右下角には地図記号の説明文があり、その下に出版者ピスカートル (Nicolaus Johannes Piscator, 1587-1652) の名前と1627年という出版年がある。左上にはラテン語でラディスラフ・ヴェレン・ゼ・ジェロチーナ (Ladislav Velen ze

6 Milan Drápela, *The Map of Moravia in the Works of John Amos Comenius*, Jaroslava Pešková, Josef Cach, Michal Svatoš (ed.), *Homage to J.A. Comenius*, Karolinum, Prague, 1991, pp.114-123.

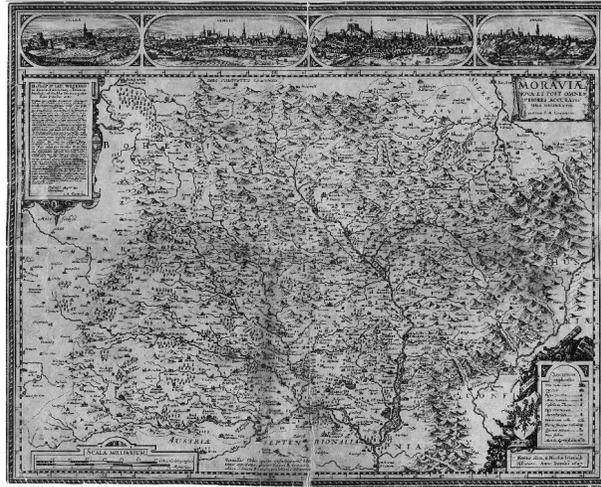


図2. コメニウスによる『モラヴァの地図』

Zerotina, 1579-1638) への献辞, 左下にはスケールが示されている。地図に描かれている範囲は、北緯37度30分から40度53分, 東経48度36分から50度7分で、部分的にこの時代に現れた他の地図と一致する (WS: 26)。献辞では、ファブリキウスの地図への言及があり、それをもとに作成されたその後の他の地図も含めて欠陥があることが指摘されている。献辞の内容は以下のとおりである。

「最も傑出したブジュツラフ, トウジェボヴァー, ザーブジェフ, そしてルダの領主であり, わが親愛なるご主人, ラディスラフ・ヴェレン・ゼ・ジェロチーナ伯様へ

私たちの国の無数の異なった地誌図が出版されてきましたが、すべてに多くの誤りがあります。私が知ります限りでは、かつて皇帝フェルディナントの侍医であったパウル・ファブリキウスのみが調査にしたがって地図を描きました。それ以降に出版されたあらゆる地図は彼の地図に基づいており、さまざまな仕方で異なった誤りが入り込んでいます。とりわけ、多くの重要な場所がここかしこで省略されている一方、あまり重要とはいえない場所が表示されています。さらに、名称が奇妙にも切断されており、主たる欠陥はそれらの地点の名称の間の位置と距離がまず正確とはいえないということであり、ゆえに地図としてはほとんど無用の代物なのです。このことは意に反した余暇にある私に地図を改善するという企てを強いることになりました。そして、私はモラヴァ中を何回も旅行しましたし、また、訪れて自分の目で見て調査することができなかつたいくつかの場所については、それらの土地をよく知っている人々の話を注意深く聞きました。私はここで申し立てます。まず私は地図上で都市や町, 第二に, 城, 砦, 修道院, そして大部分の重要な村落, 第三に, 旅行者が越えていかなければならず, 目にするであろう山岳や河川, 同様に温泉, 鉱山, ガラス製造, ブドウ

園をおき、第四に、(私はこれをとくに注意深く行ったのですが) 場所の間の距離をより正確にとりました。最後に、多くの地方の名称が(この国の大部分で使われている言語である) チェコ語で異なっており、ドイツ語でも異なっているゆえに、二種類の母語を用いる人々が地図を役立てられるように、ある場合には両方の名称を記しました。私は、尊敬する領主であり、私たちの国の傑出した貴族であり、わが偉大なる後援者であるあなたにこの地図を献呈し署名するとともに、神があなたを国に戻され、一刻も早く国があなたのもとに戻され、あなたにも国民にも大いなる喜びとなるように祈ります。流浪のうちに記します。

最高に傑出した閣下に真心から傾倒する J. A. コメニウス」

まず、この地図がコメニウス自身によるものなのかという問題については、献辞や地図の描写からほぼ解決されている。まず、献辞の「意に反した余暇 (*invitum otium*)」という言及である。前述のように、三十年戦争の勃発後、コメニウスは国内逃避行を余儀なくされ、1623年頃にはジェロチーン伯の庇護を受け、ブランディーシュ・ナド・オルリツィーに潜伏していた。『地上の迷宮と心の楽園』はここで執筆されたとき、コメニウスが隠れたという洞窟も残っている⁷。同書のカレル・ゼ・ジェロチーナ伯 (Karel ze Žerotína, 1564-1636) への献辞には、「私はこの隠れ家におりましても、天職としていたことから遠ざかっていなければならないかもしれませんが、無為に過ごしていることは許されません」⁸ とある。この記述と地図の献辞における「意に反した余暇」という表現は符合する。そして、地図にはこの地域が詳しく示されている。国内逃避行時にチェコ兄弟教団のメンバーは、ブランディーシュ近くのクロボティの丘の古い小屋に集合していたと言われるが、地図にはそれほど大きくないこの丘が「Mons Zatwor」と明確に表示されているのである (WS:23)。

以上の状況証拠から、この地図はコメニウス自身が主体的に制作に関与したと考えられているが、では、この地図はいつ頃からどのような経緯でその制作にとりくまれたと考えられるだろうか。三十年戦争のさ中に地図制作のための旅行が可能であったとは考えられないことからすれば、チェコ兄弟教団のメンバーが国内逃避行をせざるを得なくなった1622年以前には、地図制作が計画され、出版の準備が進んでいたと考えられる。すでに触れたように、コメニウスはジェロチーン家の系図や『モラヴァの遺産』を著しており、彼がモラヴァの歴史と地理に関する知識の集成を行っていたと考えれば、地図制作の説明がつく。献辞の「私はモラヴァ中を何回も旅行しましたし、また、訪れて自分の目で見て調査することができなかったいくつかの場所については、それらの土地をよく知っている人々の話を注意深く聞きました」という言及は、彼がドイツから戻りプシェロフのラテン語学校で教鞭をとっていた

7 ブランディーシュについては、拙稿「チェコ滞在記」(『日本のコメニウス』第17号、2007年、68～69ページ)で紹介した。

8 藤田訳、相馬監修、前掲訳書、vii ページ。

1614年から1616年頃のことと考えられる。

ところで、コメニウスは、ヘルボルン修学時にはニヴニツキーないしニヴェニツゼンスイスという姓を名乗っていた。コメニウス（コメンスキー）という姓をはじめて用いたのは、『地上の迷宮と心の楽園』の献辞（1623年、32歳）においてである。そして、『モラヴァの地図』においても著者コメニウスという署名がある。この理由としては、神聖ローマ皇帝軍から身を隠すための手段であったとも考えられるが、この署名は両作品がほぼ同じ時期にとりくまれたことを想像させる。

さて、『モラヴァの地図』は1627年にアムステルダムで印刷に付されたとされる。この経緯としては、コメニウスの当時の動向がある。神聖ローマ皇帝側の圧迫が厳しくなった1625年、チェコ兄弟教団の宗教会議が開かれ、教団の亡命が検討された。コメニウスは亡命の準備にあたることになり、ポーランドのレシュノ、さらにはドイツ、オランダを訪れた。1626年には、三十年戦争の緒戦であるビーラー・ホラの戦いに敗れてオランダのハーグにあった元チェコ国王・ファルツ選帝侯フリードリヒ五世をラディスラフ・ヴェレンの代理として見舞った。このオランダ訪問の際に、コメニウスがアムステルダムの印刷業者ピスカートルに『モラヴァの地図』の草稿を委ねた⁹というのが一般的な理解である。

しかし、1950年代の終わりにクハジュ（K. Kchař）によって、コメニウスによる別のモラヴァの地図を用いた地図がポーランドのヴロツワフで発見された。彼の研究によって、この原版は1627年以前、おそらく1624年に現れたと考えられるようになった¹⁰。彼の立論によれば、地図の草稿はコメニウス以外の誰かによってオランダに送り届けられたと考えるべきかもしれない。

現存する『モラヴァの地図』が実際にコメニウスによって描かれたか否かは議論がある。『世界図絵』の研究で知られるピルツ（Kurt Pilz）は、コメニウスにはそれほどのデッサン能力はなかったと主張しているという（WS: 23）。また、現在コメニウスの最も権威ある伝記を著したブレカシュタット（Milada Blekastad）も、1600年より少し後にアムステルダムに定住したゴース（Abraham Goos, 1590?-1643）によって最終的には完成されたとする（同）。地図における山の描き方は当時のオランダの地図と合致するという。ともあれ、地点の位置関係、地名の情報の豊富さ、水系の描写の正確さ、橋や上り坂等の描写において、コメニウスの地図はファブリキウスのそれに比べて明らかな改善がみられるというのがさまざまな研究者に一致した見解である。シュベルリンクは、コメニウスがモラヴァから亡命しなければ、さらに他の地図作品が現れたのではないかという（WS: 38）。コメニウスの地図は、何度も複製され、長期にわたって普及していった。

9 藤田輝夫「コメニウス小史」(1), 『日本のコメニウス』第15号, 2005年, 43ページ。

10 Drápela, *op. cit.*, p.123.

コメニウス教育学における地理学習

コメニウスは、『大教授学』第10章で、「人間が地上に送られてくるのは、単に観察者であるためではなく、やがて行為者となるためであり、したがって、あらゆる人が、現世と来世とで出会う重要な事柄のすべてについての基礎、根拠、目的をはっきりとつかむことを学んでほしい」と記した（JACOO15-1:77）。ここに、「あらゆることを（Omnes）」という彼の汎知学的教育内容論が示されている。この主張は、単なる博識をめざすものではなく、生のよりよき実践に向けられていることは明らかである。すでに触れたように、彼には「神の三書」という世界観があり、「第一に、地上で私たちをとりまいているさまざまな事物から、第二に、私たち自身から、第三に、神人であり私たち人間の最も完全な手本であるキリストから汲みとった根拠に基づいて」（同78）学ぶべきであるとした。地理的知識の学習とは、「地上で私たちをとりまいているさまざまな事物」の学習にほかならない。

そして、あらゆることを学ぶ課程として、『教授学』と『大教授学』においては4つの段階が示された。コメニウスは、学齢期を24年とし、各6年の4期に分けた。この段階は以下のように示される。

『大教授学』27章（同182）

- I 幼年期 母親の膝
- II 少年期 初級学校あるいは国民母国語学校
- III 若年期 ラテン語学校あるいはギムナジウム
- IV 青年期 大学（Academia）および外国旅行¹¹

そしてコメニウスは、各期における学習内容をあげるが、前述のように、『教授学』では4期の教育内容が1章で扱われているのに対して、『大教授学』では4期の教育内容に1章ずつが割かれている。邦訳の出版されていない『教授学』の記述を確認しておこう。『教授学』では、第3期の教育内容として、三学四科に加えて具体的に地理への言及がある。

「ここではそれ以外に自然学（*physica*）、地理学（*geographia*）、年代学（*chronologia*）、歴史学（*historia*）も含まれている。（中略）地理学も、土地と海、ならびにそこにある地方と島の領域と名称とを精神のなかで描き上げられるように提示される。」（JACOO11:179）

『大教授学』では、第28章で家庭教育としての「母親学校」での課題、第29章で初等学校教育としての「母国語学校」での課題、第30章で中等教育としての「ラテン語学校」での課題、第31章で高等教育としての「大学」での課題が示されている。特筆されるのは、4期の

11 『教授学』でも同様の記述がある（JACOO11:177）。

すべてにわたって地理学習の課題が段階的に示されていることである。以下に引いておきたい。

まず、家庭教育の重要性として、コメニウスは、「一生の役に立つ教育をしたければ、役に立つことをこの最初の学校ですべて植えつけなくてはならない」(JACOO15-1:184)と指摘する。そして、ここでの地理学習の課題としては、「地理学の初歩は、育つ場所に応じて、山、谷、野原、村、城、都とはどんなものか、わかってくるところにある」(同)とする。

次いで、初等教育段階について、コメニウスは、「母国語学校の目的と目標とは、6歳から12歳(ないし13歳)の年令のすべての少年に、繰り返し一生を通して役に立つ事柄を教えること」(同188)であるとする。ここでの地理学習の課題として、一部は天文学とも関連した内容が示されている。

「宇宙論(Cosmographia)の要点、つまり天空の円形、その中心にある地球の球形¹²、大洋の広がり、さまざまな湾と河口、地球上の主な地方、ヨーロッパの主な王国、そして何よりも祖国の都市、山、河、その他記憶しておかなくてはならないものは、しっかり身につけてほしい。」(同189-190)

中等教育段階にあたるラテン語学校については、コメニウスはその目標は、「四つの言語¹³と百科全書的学芸の全体を完結させること」(同192)であるとする。すでに触れたように、ここで言われる百科全書的というのは博学位の学力をいうのではなく、さまざまな学習内容が調和的・連関的に形成された状態をさしている。そのなかには、以下のように天文学者と地理学者についての言及がある。

「天文学者 少なくとも天文学の基本、つまり天体学と暦計算とに通じた者。言うまでもなく、これなくしては、地理学と歴史の大部分はわからない。(中略)

地理学者 これは、精神のなかに地球、海、島、河、諸国民の王国等々の像を持つ者である。」(同193)

ここにあげられている内容はきわめて広範で高度であり、コメニウス自身、「実践によって理論を固めるには長い経験が必要であり、6年では学識の海原をきわめ尽せるはずがない」と断り書きをしつつ、「少なくとも、将来、真に学識を完成するための着実な土台は手に入れてほしい」と記している(同)。

なお、コメニウスはラテン語学校の6年を文法、自然学、数学、倫理学、弁証法、修辞学の各学年に割り振っており、地理的知識の学習は第2学年におかれるとされた。

コメニウスは大学の目的を「あらゆる知識の頂上をきわめ完結すること、そして高度の部

12 コメニウスは、ヘルボルン修学時にコペルニクス天文学の著作も手にしていたが、プトレマイオスの天動説をとっていた。

13 母国語、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語のこと。

門のすべてにわたって教授を行なうこと」(同197)にあるとする。そして、地理に関しては次のような記述がある。

「大学ではあらゆる著述家が研究されなければならない。しかし、これがあまりにも負担にならず、しかも役に立つようにするためには、次のことを望みたい。つまり、地理学者は、地理学を研究する学生のために、あらゆる州、さまざまな王国、新旧両世界を、地図にまとめ、複雑な地形や海の様子を見ることができるようになっているが、言語学者、哲学者、神学者、医学者などの学者も、研究にとりくむ青年のために、同じことをしてほしい。」(同198)

さて、地理的知識に限ったことではないが、コメニウスは、自らの教授法を自然的方法と名づけ、学習者がわずかな労力で (Compendiose)、愉快地 (Jucunde)、着実に (Solide) 学ぶことができる方法を探求した。『大教授学』第17章では10の基礎をあげている。それらは下のとおりである。

- 「I. 精神が摩滅しないうちに早期から教育を始める。
- II. 魂にしかるべき準備を施してから、教育する。
- III. 全般的なものから個別的なものへ進む。
- IV. また、平易なものから難しいものへ進む。
- V. 誰も学習すべき事柄が多すぎて負担を感じない。
- VI. いつもゆっくりと進む。
- VII. 年令と教授方法に応じ、知能が自から求める以外は強制しない。
- VIII. どんなことも生徒の感覚を通じて教える。
- IX. 自分で応用できるように教える。
- X. どの学習内容も同一の教授方法で教える。」(同109)

このうち、教材の配列原理として重要なのが、基礎のⅢとⅣである。以上に見た地理的知識の配列はこれらの基礎に沿っているが、この点がより明確なのが『世界図絵』であろう。

150課からなる『世界図絵』の筆頭に来るのは1「神」であり、次に2「世界」3「天空」が来る。そのあと、自然現象としての4「火」5「空気」等が扱われ、8に「大地」が来る。ここには、「世界」という全体が示され、のちに「大地」という個別が来る。「大地」の項の内容は、「大地の上には高い山、深い谷、小高い丘、くぼんだ洞窟、平らな畑、暗い森があります」(図絵：42)という『大教授学』での母親学校段階での学習内容に対応する基礎的なものである(図3¹⁴)。

その後、個別的な自然物の学習が続いた後で、35から「人間」が扱われる。身体や精神に関する語が扱われたあとで、人文地理に関する人間の諸活動・産業等がとりあげられる。そ

14 図3～図7は、井ノ口淳三訳『世界図絵』から引用した。



図3. 大地

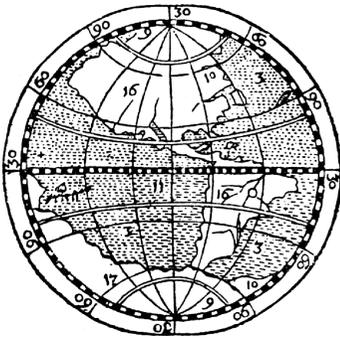


図4. 地球



図5. ヨーロッパ

して、91から知的生活が扱われ、97で「学校」、102で「測量術」、103から106で天文学、107に「地球」、108「ヨーロッパ」が扱われる。ここでは、自然を知り、自然と交渉する人間という新たな文脈において、ふたたび「地球」という全体から「ヨーロッパ」という個別が示される（図4、図5）。それらの学習内容は以下のとおりである。

「地球は五つの地帯に区分され、そのうち二つの寒帯には住むことができませんが、二つの温帯および熱帯には居住しています。

さらにそれは三つの大陸に区分されます。

一つは私達のところで（ヨーロッパ、アジア、アフリカに分けられます）。

アメリカでは、住民は私達と正反対の側にいます。

そして南方の大陸は、今なお知られていません。

北極の下に住んでいる人は、夜と昼が半年ずつあります。

海には無数の島が浮かんでいます。」（図絵：242）

「私達のヨーロッパには主要な国があります。

スペイン、フランス、イタリア、イングランド、スコットランド、アイルランド、

ドイツ、ボヘミア¹⁵、ハンガリー、クロアチア、ワラキア、スクラボニア、ギリシア、トラキア、ポドリア、タルタリア、リトアニア、ポーランド、ネーデルランド、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、ラップランド、フィンランド、リボニア、プロシア、モスコビア、ロシア」(同244)

ここに、ヨーロッパの主な王国等の母国語学校での地理的知識が盛り込まれているのは明らかである。ここに、全体→個別という原理と平易→難解という原理が組み合わされているのを見ることができる。

このあと、109から倫理学や道徳が扱われたのち、118からは結婚等の社会生活に触れられ、122で「都市」、123で「都市の内部」と、再び地理的知識がとりあげられる(図6、図7)。この段階で「都市」が扱われるのは、都市の理解のためには社会生活についての理解が不可欠であるという配慮によるのであろう。その後、都市生活のさまざまなトピックが扱われたのち、政治学的知識の関連で、137「王国と属州」、138「王の尊厳」が来る。そして、139から戦争にまつわる事項、144から宗教にまつわる事項が扱われ、150「最後の審判」で終了する。『世界図絵』における地理的学習の内容は、コメニウスの自然的方法の原理に沿っているのが明らかに見て取られる。



図6. 都市

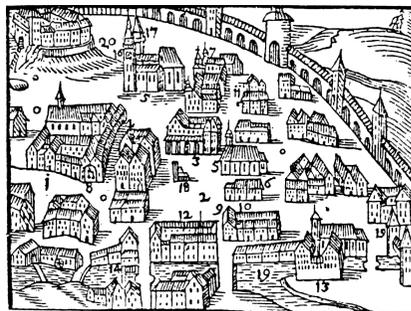


図7. 都市の内部

以上は、いわゆる机上での学習であるが、大学教育段階の学習内容として地理と関連して、外国旅行がとりあげられている。外国旅行を教育の総仕上げと見なす考え方がヨーロッパの教育伝統において一般的であることは周知のことである。富裕階級の子どもの教育の総仕上げは、外国旅行をして社交界に登場することであったし、大学生は諸大学を遊学していた。旅行を教育内容と見なす主張は、下に引くように、すでに『教授学』に見られる。

「(必要であれば) 遊学によってドイツ語、イタリア語、フランス語という外国語の知識を

15 このヨーロッパの地図では、コメニウスの祖国ボヘミアが中央に描かれている。

おさめ、あるいはそれらの知識をさらに十分に確かなものにし、また、その機会に他の場所で名声の高い方々を知るようになることもあるでしょう。」(JACOO11:179)

これに対して、『大教授学』ではやや慎重な言及がある。

「遊学については、(これには最後の6年目、あるいはその後の時期をあてる)私たちは、たとえばプラトンの意見に同意するし、それが私たちの規準に合うということを言いたい。プラトンは、血気盛んな年頃の青年が、自制心のなさを克服して外国旅行に必要な思慮と見識をそなえるまでは外国旅行をさせることに反対したのである。」(JACOO15-1:199)

こうした抑制的な言及は、教育内容が学校教育における「教授」という文脈で語られているからであろう。前述のように、コメニウスは汎知学研究を進展させるなかで、教育的視点を「教授」から「学習」へと転じていった¹⁶。そのひとつの現れと思われるのは、最晩年の『汎教育』における外国旅行の教育的意義の強調である。少々長いが引いておこう。

『「人類の風習を知りたいと思う者にとっては、家一軒を知るだけで十分だ』という。しかし、これとは逆に誰かが次のように言ったとしても間違いではない。すなわち、『地上全体を知ったとしてもほとんどそれはできない』と。(中略) 遊学を成功させるために以下のような規則をあげておこう。

1. 遊学は祖国の土地から始めるべきである。言い換えれば、あらかじめ自国であらゆることを調べるべきである。(中略)

2. 無造作で軽率な目的のために実行されないようにすることである。つまり、海や大地の広がりを見るためとか、都市の賑やかさを見るためとか、異なった着物の外観を見るためとか、ということでは実行されないようにすることである(中略)。そうではなく、思慮を増すために遊学は実行されるべきである。ゆえに、若者期の最初の部分が完成しないうちに、すなわち、学識の基礎が確かなにならない間は、遊学はしないようにすることである。

3. その場所やそこで使われている言語についてすでに知っている監督者ないしは召し使い、つまり信頼できる案内人を持つことである¹⁷。

4. 自分の関わる民族がしている実生活を、彼らが文化的な民族であり、かつそれらを役立てられるのであれば身に付けなくてはならない。

5. その土地の記録された地誌、何人かが記した旅行記、また歴史書も携えて行くようにしよう。

6. 観察した事柄を書き込むために、日記を付けなくてはならない。

(中略)

16 前掲拙著、233～236ページを参照されたい。

17 この言及は、『地上の迷宮と心の楽園』におけるコメニウス自身を投影した主人公の若者が二人の案内人に欺かれ続けるという筋書きと対応していると読むことができるかもしれない。

10. どこでも、他人の家庭にいる客として、体裁良く、ほどよく、また同時に用心深く振舞わなくてはならない。

11. 眺めるべき事柄に関しては、珍しいものや卓越したものがあれば、それがどんなものであっても、調べるに値しないものだと決めつけないようにすることだ。(中略)

12. しかし、人間の思慮の産物は多様なので、自然物よりも多く見て回るようにすることだ。」(CC2:191-193)

以上の『汎教育』での遊学についての言及をあわせてみると、コメニウスにおける地理学習は、自然的方法による知識の習得を経たうえで経験をとおして完成すると考えられていたことがうかがわれる。

結びにかえて——地理学習の意義

コメニウスにおける地理への関心とコメニウス教育学における地理学習の位置づけについて概観してきたが、以上を踏まえて、地理学習の意義を考察するための示唆を汲みとっておきたい。

現行(2008年告示)の学習指導要領によれば、社会科の目標は以下のように示されている。

「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」(小学校編)

「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」(中学校編)

学習指導要領が、国民教育における教育課程の基準を示すものである限り、社会の教科目標が「公民的資質」の形成となることは当然であろう。しかし、すでに18世紀において、ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)は『エミール』(*Émile*)において、「社会状態にあって自然の感情の優越性をもちつづけようとする人は、なにを望んでいいかわからない。たえず矛盾した気持ちをいだいて、いつも自分の好みと義務とのあいだを動揺して、けっして人間にも市民にもなれない」¹⁸と記して、人間と市民の分裂を告発していた。人間疎外は近代のアポリアであり、20世紀後半以降、学校という制度そのものを非人間化の装置であるとして告発する論調がやむことはない。

18 ルソー、今野一雄訳『エミール』上、岩波文庫、1962年、28ページ。

この点で、宗教的・文化的・政治的・経済的な規範の喪失に直面した「危機の世紀」としてのヨーロッパ17世紀において、教育の目的・内容・方法・制度を考察する際に人間存在の哲学的探求を基礎に据えたコメニウスを扱うことは、必ずしもアナクロニズムとはいえないだろう。社会科の目標が市民的資質の形成であることは、人間が社会に生きねばならない以上は当然のことであるとしても、それが人間の実存と結合されなくては、いかなる学習も生きた力とはならないだろう。

『地上の迷宮と心の楽園』の「読者への挨拶」で、コメニウスは、「地上のすべてを潜り抜ける」体験は世界の無常性を認識させ、「精神の平安と安全はそれ以外のところでは見出され得ないということ」を学ばせると記している¹⁹。ドイツのコメニウス研究者シャラー (Klaus Schaller) は、「迷宮」と「心」は人間が人間となるための運動の終点であるという (WS: 23)。人間はさまざまな社会活動を行うが、究極的には死に連なる絶対的な「無」が暴露される。無の体験は人間の内面性への呼びかけであり、これに応えることで、人間は実存に至ることができるということであろう。

この意味で、コメニウスが、『汎教育』において、遊学の意義を強調したことは重要である。遊学は、学校教育という庇護された空間での知識の習得を超えて、デカルトのいう「世界という大きな書物 (grand livre du monde)」における迷宮的な体験を通して人間形成を可能にする対象と見なされていた。それは、世界像を獲得するための経験であるとともに、遊学 (peregrinatio) が巡礼を意味するように、求道の旅であった。あえて自らの住む地を離れて、未知の環境に踏み出そうとすることを可能にするのは、自己への閉塞から解放された世界への開放性であろう。コメニウスの自己形成の過程に地理への強い関心と営為があったことは、教育における地理学習の必要性を示すのみならず、教育学的思考における地理的視点の本質性を示唆するといえるのかもしれない。

暫定的な結論として、コメニウスの意味での地理学習の目的は、自己と他者の個別性を克服してひとつの普遍性に到達することである、といえるだろう。

19 藤田訳、相馬監修、前掲訳書、x ページ。

SUMMARY

Education and Geography in J. A. Comenius

Shin'ichi Sohma

The purpose of this paper is to consider the significance of geography education through surveying the relationship between education and geography in Jan Amos Comenius (Komenský).

In the process of the prevalence of school education in modern times, Comenius as a voluminous educationist has been exclusively seen as an educator. Even if his contribution to education was so enormous, his activities are more than the area of education. *The Map of Moravia* published in 1627 is an important work to prove his interest in geography.

Due to the outbreak of the Thirty Years War, Comenius' geographic interest was not fully developed. However, in his study of education, he regarded geography as an indispensable element of learning. In *Didactica magna*, he arranged the contents of geography according to the degree of the development of children's faculties.

In the development of educational study, Comenius paid more attention to the learning aspect than the teaching aspect of education. Therefore, in *Pampaedia* drafted in his later years, he considerably wrote about the significance of peregrination. Here, it is more likely to see the purpose of geography learning in Comenian meaning. In his drama *Labyrint světa a ráj srdce* drafted in 1623, he already pointed out that man could be man through a labyrinthal experience. The purpose of geography learning in Comenius would be to access universality through overcoming the particularity of self and others.